プラトン『ヒッピアス(小)』における対話の分析[1]

瀧 章次

内容

Ⅰ プラトン研究における、対話の分析の先行性とその課題
Ⅱ 「議論」の分析を中心とした先行の『ヒッピアス(小)』解釈
Ⅲ 対話の分析に基づく、「議論」の分析を中心とした先行の解釈の批判
Ⅳ 結語

プラトン研究における方法論上の問題に言及し(Ⅰ)、具体的に、先行の『ヒッピアス(小)』解釈(Ⅱ)を、その課題に基づいて検討する(Ⅲ)。

Ⅰ プラトン研究における、対話の分析の先行性とその課題

プラトンの研究に確立された方法はなく、公共的に議論する為にはそれぞれの手続きを明らかにする所から始めなければならない[2]。私は、プラ

[1] この論文は1995年 The University of Durham に受理された Master of Lettres 号論文 'Reading Plato's *Hippias Minor*: Introduction for reading Plato's dialogues and Analysis of the *Hippias Minor*' に基づくものである。先立つ諸稿は、月曜プラトン研究会(1996.6)、ギリシア哲学研究会(1996.12)、東京大学西洋古典学研究室における例会(1998.4)、日本西洋古典学会第49回大会(1998.5)において口頭発表したものである。引証は、版刷による重要な異同がないと判断し得る限り初出年を示し、研究の進展を測る一標示として提示する。使用文献については巻末文献表に示す。

[2] Crombie, 1962, 14–30; Stokes, 1986, 27; Kraut, 1988, 177; id., 1992, 29; Irwin,

トン研究の基礎は対話篇にあり、その対話篇において、直接作者の責任に帰せられる事は、会話の描写であり、それを除いてほかにないと考える[3]。言い換えると、作者の間接的言明を引き出すのは危ういと考える。理由は以下の通り。(1)(a)思考の上では、作者が会話を描写する劇作形式を選択している事実と、劇作形式を通して間接的言明を意図しているとする仮定とは、共に解釈上経験的に与えられる事ではあれ、手続き上同等の権利を有する事柄ではない[4](「ソクラテス文学」というジャンルが明確にならない限り[5])。(b)また同名登場人物の主張を束ねるには[6]、個々の対話篇内部に描かれている性格付けを確立し比較対照する事を要し、その為にはまず対話全体の分析を要する[7]。(2)(a)研究の現実においても、登場人物の「書かれたもの」や「対話」についての発言[8]を作者プラトンの立場として援用する手続きは論点先取を免れない[9]。(b)また、アリストテレス

1988, 199; id., 1992, 77; id., 1995; id., 1996; Vlastos, 1991, 53; Press (ed.), 1993; Day, 1994, 16–17; Rutherford, 1995; Cook, 1996; Kahn, 1996, 36–70.

[3] プラトン研究史におけるテクスト外のプラトンの教説等に還元する立場とプラトンの教説を不可知とするテクスト内在主義の立場については、Tigerstedt, 1974; id., 1977; Bowen, 1988; Erler, 1987, 1–18。

[4] Contrast Irwin's review of Rutherford, 1996.

[5] Patzer, 1970, 188; Nussbaum, 1986, 87–88; 122–135; Giannantoni, 1990, iv, 345–346; Irwin, 1992; Vander Waerdt, 1993; id. (ed.), 1994; Nightingale, 1995; Kahn, 1996, 1–35.

[6] Irwin, 1977; id., 1995; Santas, 1979; Kraut, 1992; Penner, 1992; Vlastos, 1994; Smith & Brickhouse, 1994.

[7] 対話篇を独立の作品として分析する事の重要性については、Stokes, 1986, 1–35, esp. 2; see also Friedländer, 1969, 154–170, esp. 161; Strauss, 1964, 50–60; Weingartner, 1973, 1–7; Sandbach, 1985, 478–497; Scodel, 1987, 9–19; 加藤, 1988, 3–26; Rowe, 1992, 53–68; Kosman, 1992, 82–85; Press, 1993; Thayer, 1993; Thesleff, 1993; Rutherford, 1995.

[8] 例えば、*Phdr.* 275c5–277a5; *R.* 487b1–d5. 古典作品の略号は LSJ による。プラトン作品の引用は Burnet (Oxford Classical Texts) による。

[9] 田中, 1979; 藤沢, 1980。

の証言[10]も偽作問題の絡むプラトンの書簡[11]も、対話篇を作者の間接的言明に転換する具体的な手続きを与えるものではない。

対話の分析に対する反論は、与えられた文の文脈を再構成する事は恣意性を免れないと批判するものである[12]。この「恣意性」を解釈の実際に即してとらえ直すと、個々の文を、登場人物が――いずれであるかは重大な問題であるが[13]――凡そ問いまたは主張の意図のもとに用いており、そのように聞き手に理解されている、この点では解釈上の一致を見るであろう。登場人物が考えもせず語り出しているか否かは微妙である。しかし、常に誠実性に背いて、真意に反して語っていると仮定するのは困難である。しかし、当の問いまたは主張が、更にどのような企てを含んで、発言され、また理解されているかとなると一致を見ない。言語的な通常の慣習以上の、当事者に特異な了解に関しては、当の当事者の行為が話題とならぬ限り(例えば、πῶς λέγεις、διανοούμενος ... 、οὐ μανθάνω、φράζω 等の発言)解釈者には見えない。直接的な描写法においては直接の手がかりはなく、間接的描写法においても[14]現実に作者はほとんど記していない。更に、語の意味の文脈的な再構成という事になると、話し手に、あるいは聞き手に特異の、また常識の、いずれの立場の使用法に基づいて話し手が導入し、聞き手が理解するかは、一層決定困難である。

このような解釈上の困難は経験的に明らかであるが、しかし、文脈抜き

[10] アリストテレスの証言の性格については、Taylor, A. E., 1911; Vlastos, 1991; Kahn, 1992; Penner, 1992 を見よ。未完了 ἔφη によるプラトンについての直接の証言力については、Irwin, 1996; 井上, 1974。

[11] *Ep.* VII. 伝記資料の問題性については、Cherniss, 1945, 1–30; Riginos, 1976; Kahn, 1992; Momigliano, 1993。

[12] Kidd, 1992; Kraut, 1992.

[13] Stokes, 1986; Frede, 1992. Punctuation は解釈者が決定しなければならない(Turner, 1987)。

[14] *Chrm.*, *Ly.*, *Euthd.*, *Prt.*, *Phd.*, *R.*, *Smp.*, *Prm.* の各篇。*Euthd.* の Dionysodorus が Euthydemus の意図を代弁する場合も、*Hp.Ma.* の Socrates が「問い手」の意図を代弁

の文が与えられているというのは解釈に伴う錯誤であろう。従って、「恣意性」を認め公共的に議論をするには、解釈者は前提を明らかにし、部分と全体の文脈を充足し、会話を整合的に再構成できるか試みることが課題となる。そこで注意しておくべき事は以下の事である。

(1)描かれていない発話状況を憶測することは劇作上意義を持たない。(2)その都度の発言に現れる登場人物の態度は、それぞれの視点を示す[15]。(3)対話は一人の話者による単線的構造の議論ではない[16]。(4)問いや説得において主導権を握る側がいつでも好きな時に好ましい応答を確保できるとは言えない[17]。(5)問いはしばしば相手の信念についての問いであることが標示される[18]。(6)先行する場面における相手の信念の吟味は、しばしば「われわれの同意」として語られる[19]。

以上の事から、ひとまず、「議論」を対話当事者から中立的なものとして、分析の中心に据える解釈に対しては、対話の分析の側から、次のように申し立ててよいだろう。対話者の理解する「議論」の整合性、説得力を分析する上で、文の形式化を施し、名辞の解釈の可能性、「議論」の妥当性を検討することは、対話の全体像を明らかにする上で有効であるが、「議論」が対話のどこで具体的に働いているか解釈の前提を明らかにしなけれ

する場合も考察の対象に含む。

[15] Klosko, 1983; Erler, 1987, 13.

[16] *R.* 487b1–d5.

[17] Simmias in *Phd.*; Glaucon in *R.*; Stokes, 1992 (b).

[18] Stokes, 1986. 一般的に否定疑問文が必ず「肯定」の答を要求する言語的慣習として働くとは言えない(Davison, 1975 には反対する)。しかし「ソクラテスのエレンコス」の場面で、「無知の表明」にも関わらず、一般的に「ソクラテス」の信念を、従って、作者プラトンの立場を導出できると考える立場は、Vlastos, 1983 (a), 52–55; id., 1991, 50–53; id., 1994; contrast id., 1956 and 1971; Irwin, 1977, 291; Santas, 1979, 69; Penner, 1992, 131–132。しかし一つの対話篇、一つの文脈から一般化することは危険である。

[19] 一人称複数形代名詞、ὁμολογεῖν、συνδοκεῖν、σύμφαναι、συγχωρεῖν、συνομο-

ばその分析は十分ではない。

II 「議論」の分析を中心とした先行の『ヒッピアス(小)』解釈

『ヒッピアス(小)』の解釈史[20]もまた対話の展開について十分な分析を与えてきたとは言い難い。論駁の対象、結論、論型が読者に見易い故に、図式化された議論に基づき、誤謬推理の典型、あるいは〈術と道徳との類比の論法〉による帰謬法の典型とみなされてきた。当の「議論」の対話の展開における働きを顧みず、アリストテレスの解釈の枠組みに従い[21]、「プラトンあるいはソクラテスの教説」における位置づけに集中する余り、「議論」の形成について相対的に分析は不十分のままであった[22]。では、対話

λογεῖν等の動詞の用いられる文脈による。

[20] 解釈史の概観はGrote 1865, 55–56; Fouillée, 1872, 1–10; Kraus, 1913, 1–7; 46–62; Schneidewin, 1931, 18–24, 34–35; Guthrie, 1975, 196; Jantzen, 1989, xi–xvii。

[21] Arist. *Metaph.* 1025a6–9; cf. id. *EN* 1137a17–19; 1140b21–24.

[22] Stallbaum, 1832; Zeller, 1839; Grote, 1865; Fouillée, 1872; Ritter, 1910; Apelt, 1912; Ovink, 1931; Sciacca, 1953; Hoerber, 1962; Guthrie, 1975; Müller, 1979; Jantzen, 1989; Penner, 1992. 作者プラトンの意図への言及はSchleiermacher, 2. Aufl. 1818, 291–292; Stallbaum, 1932, 233; Zeller, 1839, 155; Fouillée, 1872, 50; Gomperz, 1905, 294; Ritter, 1910, 305; Apelt, 1912, 204; Kraus, 1913, 59; Croiset, 1920, 21–22; Ross, 1924, 348; Taylor, 1926, 37; Shorey, 1933, 86–87; Hildebrandt, 1933, 49; Sprague, 1962, 77; Friedländer, 3. Aufl. 1964, 127;戸塚, 1975, 223; Waterfield, 1987, 267–271; Jantzen, 1989, 108; Vlastos, 1991, 279。作者とも対話当事者とも異なるある種の構造を語るものは Goldshmidt, 1947;吉田, 1980。Ast, 1816, 463; Socher, 1820, 144–150; 小沢 (1983) は、ソクラテスの問いに主張を読み込む。いわゆる「イデア論」を読み込むのは、 Fouillée, 1872; Sciacca, 1953; Müller, 1979; Erler, 1987, 137–145。Ovink (1931), 清水 (1988), Blundell (1992) は、ホメロスの叙事詩を当事者の会話の主題としてばかりでなく、プラトンの役づくりにまで強く読み込む。Blundell は、対話篇全体における登場人物の描かれ方を対話の進行に即して分析している点で視点を同じくするが、ヒッピアス像に

の展開をどのように見るべきか。以下において、対話の部分と全体の文脈の継時的な再構成は別紙に譲り、まず従来の解釈を顧み、「議論」の形成から見た問題点を指摘し対案を提示する方式をとる事によって、対話の分析の有効性を展望する事をもって次善としたい[23]。

類型的な先行の解釈は以下の通り。

第一部(363a1–369b7)

P1 〈嘘つき〉(ψευδής)と〈正直者〉(ἀληθής)とは性格(τρόπος)として異なる。(365c3–7)

P2 〈嘘つき〉とは、嘘に関わる内容について、〈欲すれば常に嘘をつく力のある人〉のことである。(366a8–b4)

P3 〈正直者〉とは、正直に関わる内容について、〈欲すれば常に正直に語る力のある人〉のことである。(典拠なし。P2 及び算術の事例[366c5–e1]からの類推)

P4 任意の技術の領域において〈欲すれば常に偽を語る力のある人〉と〈欲すれば常に真を語る力のある人〉とは同一である。(366c5–369a2)

P5 技術において成り立つ事は徳においても成り立つ。(cf. 368a8–b1; 368e3–369a2)

P6 正直は徳の一つである。(cf. 370e2–3)

C1 〈嘘つき〉と〈正直者〉とは同一である。(369b3–4)

第二部(369b8–376c6)

P7 〈わざと嘘をつく人〉は〈心ならずも嘘をつく人〉より行為の意図の観点において悪い。(370e5–9)

P8 〈わざと嘘をつく〉事は〈わざと誤る〉事の一つである。(372a3; 372d5)

ある使用にも拘らず、Ritter, 1910, 306–307; Pohlenz, 1913, 68–69; Friedländer, 1964, 131–132; Jantzen, 1989, x; 29–38 と共に、古代ギリシアにおける教育の歴史的状況を導入する点で異なる。

[23] 全体と部分の分析に関する試みはM.Litt. 論文に譲る。

P9 任意の技術において、〈わざと誤る人〉は、正しい事も誤る事もできるので、能力の点でよい人である。(373c6–375c6)
P10 正義は技術である。(375d8–e8)
C2 〈わざと不正を犯す人〉はよい人である——正義という能力または意図の点で。(376b4–6)

第一部の議論：ヒッピアスはP1を承認する一方、ソクラテスはP1を論駁の対象として据える。ヒッピアスが顕在的・潜在的にP2からP6までを承認すると考えるので、ソクラテスは、ヒッピアスはC1を承認するべきであるという立場をとる。しかし、ヒッピアスは結論を受け入れることを示さない。一方、ソクラテスはP2からP6に同意していた事を示す(ὁμολογεῖν 368e3–4; cf. 367c7–d2; 369a5; 369b3)のでC1を擁護している。
第二部の議論：ホメロスの英雄評価をめぐって、ヒッピアスはソクラテスとは形式上対立するP7の立場を示す。種々の領域における〈わざと誤る人〉を能力の点で優れているとする承認を得るばかりで、ヒッピアスはC2を示唆する結論を、執拗に否定する。ソクラテスは、再度P10という予測された前提を顕在化させた上で、C2への最終論証を試みる(375d8–376c1)。しかし、ソクラテスは次の前提を明確にした上で、論証の必然性を付言しつつ(376b8–c1)、ヒッピアスとともに結論を放棄する。

P11 〈わざと誤る人〉が存在する。(376b5–6)

ソクラテスはヒッピアスを自己矛盾に陥れつつ、実は持論としてP11を否定するので、同時に解決案を示唆する。即ち、C2はP8からP10より帰結するが、それらの前提であるP11が実は誤っている。従って、技術において成り立つすべての事が徳においても成り立つわけではない。徳は悪を行う力を含むが悪を欲する事はない。従って、その意味において、技術と徳とは類比的な関係に留まる[24]。

[24] 手段の知識としての技術・知識の領域においては、善用と悪用との両用の能

以上の先行の類型的な解釈において、「嘘つき」、「正直者」を、性格とする事と力とする事とを区別すれば、また「嘘をつく」と「偽を語る」とを、「正直に語る」と「真を語る」とを、「意図におけるよさ」と「能力におけるよさ」とを区別すれば、矛盾が生じないことは、明らかである。問題は、これらの主張が、どのような文脈の、誰の意図のもとに置かれており、その問題となる名辞はどのような意味を担わされているか、という事になる。

Ⅲ　対話の分析に基づく、「議論」の分析を中心とした先行の解釈の批判

先行の解釈１　ソクラテスは行為の実行から能力を導く点(P1 から P2、P3)では正しいが、能力から行為の実行を導く点(P2–P6 から C1)では、語

力が成立するが、目的としての徳の知識の領域においてはもはや両用性が成り立たないと解釈する立場は、Schleiermacher, 1818, 291–294; Socher, 1820, 144–150; Stallbaum, 1832, 234–235; Zeller, 1839, 151–153; id., 1859, 101 sqq.; Grote, 1865, 67–69; Fouillée, 1872, 38–44, 60, 70; Hunziker, 1873, 28; Smith, 1895, xliii–xliv; Gomperz, 1905, 294–296; Ritter, 1910, 305, 307–308; id., 1931, 39; Kraus, 1913, 50–52; Pohlenz, 1913, 61–63; Croiset, 1920, 22–23; Wilamowitz, 1920, 103; Taylor, 1926, 37–38; Shorey, 1933, 86–87; Goldschmidt, 1947, 109–110, 112; Calogero, 1948, xi–xii, 54–55; Gould, 1955, 43–44; Sprague, 1962, 76; Hoerber, 1962, 129; O'Brien, 1967, 96; Gulley, 1968, 16, 85–87; 戸塚, 1975, 222–223; Penner, 1973, 139; Santas, 1979, 147–155; Waterfield, 1987, 269–270; Blundell, 1992, 161; Allen, 1996, 25–29; Kahn, 1996, 113–121。能力の両用性は成立しないがそれ以外の点では術と徳とは性質を共有すると解釈する立場は、Jowett, 1871, 603; Taylor, 1926, 37; Robinson, D. B., 1971; Penner, 1973, 139; Irwin, 1977, 299; Kraut, 1984, 313; Waterfield, 1987, 269; Blundell, 1992, 160–161。「目的」の意味から自明な結論は、目的の選択における実践的な問題が展望されているとする立場は、Schleiermacher, 2. Aufl. 1818, 459; Hunziker, 1873, 28; Gomperz, 1905, 294; Goldschmidt, 1947, 109–110, 112。

の多義性に基づく誤謬推理を導入している[25]。

対案 明らかに形式的に矛盾する結論を含む問いをソクラテスが投げかけるとき(367c7–d2; 369b3–7)、先行する問答において答え手の関与した内容のどこかに誤謬があると聴衆も解釈者も想定するのはもっともな反応である。

しかし問い手ソクラテスの「詭弁」は特定しがたい。(1)対話当事者が語を多義的に使用している意図を表明していない。(2)確立された πολύτροπος[26] の意味はない。従って多義的使用を認定するのは困難である。(3)ソクラテスは相手の信念を問い[27]理解する事以上には何も表明していない(363a1–b1; 364c8–d2)。(4)問いは真でも偽でもない。内容及び順序に関する問答の適切性は論議の対象になっておらず、また、不敗の問答競技家と公言するヒッピアスは特定の問いの不適切性を指摘することができない(cf. 369b8–c2; 373b4–5)。(5)ヒッピアスは積極的に応答している(364a7;

[25] Arist. *Metaph.* 1025a6–9; X. *Mem.* IV.12 sqq.; Smith, 1895, 10; Sprague, 1962, 68; Hoerber, 1962, 125; Mulhern, 1986, 284–285; Waterfield, 1987, 270; Zembaty, 1989, 63. なおソクラテスが意図的に誤謬へと誘うとすることについては、Ast, 1816, 464–464; Stallbaum, 1832; Raeder, 1905, 94; Ritter, 1910, 298; Pohlenz, 1913, 60; Tarrant, 1928, xviii; Shorey, 1933, 88; Hoerber, 1962, 125; Mulhern, 1968, 285; Blundell, 1992, 146; Kahn, 1996, 113–121。Vlastos は Weiss を支持してソクラテスの不正を除去するが(1991, 277)、Weiss はソクラテスがヒッピアスから好きなように同意を確保できると仮定している(1981, 277)。Cf. Müller, 1979, 68; Jantzen, 1989, n.19 in 57.

[26] 語義の不確定性によってアンティステネスの失われた対話篇の対話が成立している。cf. Patzer, 1970, 164–190, esp. 187; Giannantoni, 1990, ii.209–211; Kahn, 1996, 121–124.

[27] 363b7; 364b3; 364c1; 365b8; 365c3 (ἄρα); 365c6; 365d2–3; 365d6; 365e1; 365e5–6 (ἄρα); 366a2; a3; 366a8; 366b2; 366b4; 366b8 (ἄρα); 366c5 (εἰ); 367b8 (θῶμεν; Robinson, 2nd ed., 1953, 93–97); cf. σὺ λέγεις 367a5! 問いの文脈に従って、Burnet の punctuation は次の箇所で問いとすべきである。365b7–8, 365c4, 365e6, 366a8, 367c4, 367c6, 367e6, 368a5, 368a7, 371e5, 374c1, 374e2, 375a3, 375b7, 375c6, 376a4, 376a5, 376b4。また ἄρα + ὡς ἔοικεν は間接的な問いの遂行である。

364c3; 364e7; 365c7; 365d7 οἷον の消失; 365e5 τις の消失)。(6)論駁後の回顧の通り(369e2–370e4)、二英雄の区別に従って、相反する徳の一致を引き出せるという保証は、会話の当初からソクラテスに与えられているわけではない。

だからといって、当事者が通常の「性格語」を一貫して「能力語」として用いているから、議論は健全である[28]とも言えない。(7)論争的な構えのヒッピアスが(364a8; cf. 363d4 φύγοιμι; 369c1)、πολύτροπος を終始一貫して一義的に用いる意図を持っていたかは疑わしい。(8)ソクラテスがこの語の意味を特定しえていたとも想定できない[29]。(9) ψευδής は意味をより限定でき[30]、詩句の引用に際し、ヒッピアスが、「嘘つき」として使用していると聞き手に解される文脈(364e7–365b6)が整っている。「性格(繰り返される行為の傾向)」「行為者の意図の性質」「道徳的な評価」のそれぞれの意味的要素を担っていると解される。(10)対話当事者の約定によって、「性格語」が通常と異なる「能力語」の意味で用いられている[31]とはいえ

[28] Weiss, 1981; Zembaty, 1989; Vlastos, 1991.

[29] 解釈者は一様に、後続する会話の進行から先行する場面での首尾一貫性を対話者に要求している。wily : Zeller, 150; Kraus, 9; Wilamowitz, 102; O'Brien, 97; Guthrie, 192; Weiss, 245; resourceful : Ritter, 298; Ovink, 136; Friedländer, 126; Mulhern, 283–284; Patzer, 174; Blundell, 143。問答競技は口に出して関与してしまった事に従わざるを得ない。確立された意味のない語を問答に導入してホメロスの責任表示のもとに豊富な引用をし、英雄の性格について解釈を展開する事によって主導権を握ろうとしていると見るべきではないか。ソクラテスの 364e1–6 における否定疑問は、よく知る「アキレウス」について πολύτροπος が述語できるかを尋ねているのであって、文脈から Mulhern, 1968, 283; Weiss, 1981, 245; 小沢, 1983; Erler, 1987, 122–123; 清水, 1988; Philips, 1989, 366の様に、何らかの意味に関する予断に基づいた問いとするのは不自然である。この否定形の疑問文は肯定の答を導くと考える必要はない(*Chrm.* 163b1–2; cf. *Hp.Ma.* 293a4–5)。

[30] LSJ *contra* Vlastos, 1991, 276.

[31] ここでソクラテスは問うている。約定について、Arist. *Metaph.* 1025a6; Hunziker, 1873, 28; Pohlenz, 1913, 16; Mulhern, 1968, 286; Weiss, 1981, 244; Erler, 1987, 123;

ない。理由は以下の通り。(a)文脈として語の定義を求めている(366b4–5)と解するのは不自然である[32]。(b)無条件で写本Fの読み(366b4–5)に従う[33]としても「定義」の根拠を定冠詞の語法にどこまで求められるか疑わしい[34]。(c)「議論の無謬性」を守ろうとしても、「学習・訓練・経験を積んだ実行の能力」としての「正直」、「嘘つき」は習慣的実行を伴わないとしない限り、仮に τρόπος をも能力と解するにしても[35]、性格形成と無関係な事例に沿い、「病」との多義的な関係に基づく(366b7–c3; 365d6–7)「能力」の規定に同意する時、意味の転換を認めないわけにはいかないであろう。

実態は、ヒッピアスが、行為者の意図の道徳的評価よりも行為者の能力の評価を優先する立場への関与を、ソクラテスに問われる可能性を開いている[36]。(11)詩句の引用において、「正直」、「嘘つき」が「行為者の意図」において問題とされている事柄である事を限定せず、「意図を実現する」という「能力」と結びつく側面を示唆している。(12)実際ソクラテスが

Vlastos, 1991, 276; Blundell, 1992, 149. Cf. Woodruff, 1982, 64, note on 293e8.

[32] 366a6 sqq. で「欲する時にいつでもできる」事を問う事によって、「経験に裏付けられた力」が示唆されている。

[33] Fの読みはCroisetの確認を受けている。写本F及びバーネットのその報告の問題について、Burnet, 1903, Praefatio; Dodds, 1959, 34–67; Bluck, 1961, 129–140.(残念乍ら、Vancamp, B., *Platon, Hippias Major, Hippias Minor* [Stuttgart, 1996]; id., 'La tradition manuscrite de l'Hippias mineur de Platon', *Revue belge de Philologie et d'Histoire* 74 [1996], 27–55はまだ見ていない。)

[34] Taylor, 2nd ed. 1991, 158–159.

[35] Weiss, 1981, n.7; Erler, 1987, 122–123.

[36] φρόνησις 365e5; φρόνιμος 365e5 (Arist. *EN* 1144a26–28; *La.* 192e1); σοφός 365e10 (cf. 364c6; 369d3; 372b1); σοφία 368e5 (364c2; 372b5); πανοῦργος 365e4, 5; πανουργία 368e5; ἀμαθής 365e10, 367a2; ἠλιθιότης 365e3; ἀφροσύνη 365e3; ψεύδεσθαι 366b2; 370a2; 371d6); ψευδῆ λέγειν (366e5); ἀληθῆ λέγειν 370d6; ἀλαζών 369e4 (contrast MacDowell, 1990); ἁμαρτάνω, ἐξαμαρτάνω 372d5, 372e2. 領域を限定せずに、道徳的によく、あるいは悪く評価する意味を担うと同時に、道徳と無関係の能力の意味を担う可能性がある(cf. Dover, 1974)。

「力」について尋ねる時(365d6–7)、尋ねられている事以上に、「虚偽」や「欺く」事をしおおせる「力」を示唆する(365d7–8)。ソクラテスが再び πολύτροπος を余分に導入する事(365e2 bis)にも暗示される様に、この「力」はオデュッセウスの既に行われた事から導かれる「力」でもあろう。しかし、オデュッセウス評価との整合性を越えて、問答において「欺く意図を実現する力」について問われる事を拒めない。

(13)確かにソクラテスの習慣的実行を示す ἀπατεών (365e3)に応じて、ヒッピアス自身「欺く」(ἐξαπατᾶν)、「悪さをする」(κακουργεῖν)、という「道徳的評価を担う語」によって「道徳的な評価」の点で「正直」と「嘘つき」とが異なる事に関与する立場を示唆し、自己矛盾を防いでいるとも言い得るが、一方で「意図を実現する力」を積極的に「虚偽・欺き」の領域において肯定するものでもある(365e4–5; 365e8–9; 365e10–366a1[37]; 366a8–b4)。

先行の解釈2　(a)同一の技術・知識が「真を語る能力」と「偽を語る能力」との両方の能力を備えている様に、嘘つきと正直とは、能力の点では同じである。(b)従って、「能力」の点に限って「正直」と「嘘つき」についての議論(P4)(366c5–369b7)は健全である[38]。

[37] Burnet の punctuation による comma を αὐτά γε ταῦτα の前に移し、αὐτά γε ταῦτα ἐξαπατᾶν を σοφός にかける事によって、ἄλλα τε πολλὰ καὶ ἐξαπατᾶν (365d8), ὅτι ποιοῦσιν (365e7), διὰ ταῦτα (365e8), ταῦτα ἃ ἐπίστανται (365e9) と共に、εἰς ἅπερ ψευδεῖς (366a4) 以下、算術の導入につながる一貫した領域的な虚偽を説明できる。このような σοφός の語法はプラトンの用例から支持できる(Brandwood, 1976 の σοφός 及び関連の δεινός, ἱκανός, δυνατός の採取例の用法、語順[cf. *Prt.* 310e6–7; *Euthd.* 271d3]及び Lyons, 1963, 161–174)。従って、村治, 1974, 77、戸塚, 1975, 83、Vlastos, 1991, 276、Blundell, 1992, 147 に反し、Schleiermacher, 1818, 302、Croiset, 1920, 30、Jantzen, 1989 と共に、366b5, 6 の不定詞 ψεύδεσθαι を σοφός にかける。

[38] Arist. *Metaph.* 1025a6–9 を参照せよ。「真を語る」、「偽を語る」を道徳的な意味に解しても健全だと考える立場：Stallbaum, 1832, 230–231; Zeller, 1839, 150, 153; Smith, 1895, 91, 93, 96; Pohlenz, 1913, 60–61, 66; Croiset, 1920, 23; Taylor, 1926, 36;

対案 (1)(a)の類比的議論は対話者の承認の内に見出し難い。ヒッピアスが先行して言及し関与しているのは「種々の領域に関わって嘘をつき欺くことを成し遂げる力」である(365e10–366a1; 366a4; 366a8–b4; cf. 367a6–8)。従って、技術・知識の領域で専門家について正直か嘘つきかを問うのは的はずれであるが、だからといって、「真を語る能力」はともあれ、道徳的文脈を捨象した「偽を語る能力」が、当事者に理解されているということにはならない。また、ソクラテスがヒッピアスの「経験知」としての算術等を問う意図は、問答の戦略として唐突であるにしても、文脈として唐突に、持論の技術と徳との類比に従って、技術の領域で同意を求めている事[39]にはならない。

(2)(b)にいう「議論」は健全ではない。技術・知識の領域の経験において、誤った用い方も正しい用い方も同等にできるとする立場は、ヒッピアスに特異な立場である。技術・知識の領域において、「欲すれば過たず真を語る能力」と「欲すれば過たず偽を語る能力」とは同一の意味で「能力がある」とはいえない。(イ)技術・知識の領域で、専門家が本来の目的で知識を用いる能力を持っていると言う時、学習・訓練・経験に裏付けられた強い意味で持っているといえる。しかし、非本来的な使用はその可能性に開かれているという意味であって、先の意味で能力を持っているとは限らない(cf. *0.* 296b3–d5)。(ロ)判断の真偽の基準は同一であるから、真か偽か判断する能力としては同一であるが、人前で真を語ることと偽を語ることとは同一ではない。従って、ヒッピアスこそが、偽の内容に関与しない状況を想定するか、あるいは、偽を語る事を道徳的に度外視するかして、

Guthrie, 1975, 193; Weiss, 1981, 244; Waterfield, 1987, 277; Zembaty, 1989, 54。道徳的文脈を捨象した場合に限って健全ととる立場 : Fouillée, 1872, 54, 60; Kraus, 1913, 15; Ovink, 1931, 161–163, 165; Sprague, 1962, 75–76; 戸塚, 1975, 222; Santas, 1979, 148–149; Erler, 1987, 125; Vlastos, 1991, 276–277; Blundell, 1992, 146。いずれにとっても健全ではないとする立場 : Jantzen, 1989, 58, 62–64。

[39] 367d7, 368a6–7, 367a9, 367c4, 367c5, 367c8, 367d8, 368a8–b1, 368e5. Contrast 369b3–4.

「真を語る能力」と「偽を語る能力」とを経験的に形成すること(367b2; b5; 367c5; 367e5–6; 368a6)を問われているのである(「敵に仇をなし味方を益する」為に用いられる技術のあり方と通底する考えとはいえ)。(ハ)「知識」を媒介項としての「正直」と「嘘つき」との両項の同一性の論証は、暗示されるのみで(366e3–367a5; 367e4)、範例的な算術に関するヒッピアスの経験知における問答では、結論に先立つ問い(367c2–4)は、必ずしも妥当な推論形式を含んでいるとは言いがたい。

先行の解釈3　ソクラテスは(373c6 sqq.)、自説の技術・知識と徳との類比に従って、「わざと不正を犯すものが正義の能力を持っている意味で正しい」ことを論証しようとしている(P7–C2)。

対案　ソクラテスを「考察」へと押し出しているのは、対話の上での行きがかりである。(1)ソクラテスは棚上げしたはずのホメロス解釈を先行の会話の回顧において導入する。ヒッピアスは形式的な論駁に至った先行の議論への関与を問われ(371e7–8)、答えず、問い返す(371e9–372a5)。ソクラテスはそれに答えず、長広舌をもって問答の主導権を取り返そうとし(372a6–373a8)、エウディコスを間にはさんで、ヒッピアスの直訴を招く(373b4–5)。しかし「ソクラテスが言論を撹乱する事」の解釈をめぐるディレンマを突きつけられ(373b6–9)、逃れるためにエウディコスの要請に乗り、問答を続けるのである。(2)ヒッピアスからみて、ソクラテスは自説を展開していると映るが(372e)、記憶力に従って辿るならば、「自説」とは己が先に関与したことである。(3)「考察」の対象が「行為者の意図」ではなく「行為者の能力」の観点から問われていることは、先のディレンマから既に明らかである。(4)ヒッピアスは「嘘つき」を含む「不正な行為」をめぐっては、ソクラテスの促しにもかかわらず、「能力」の観点から答えることを聴衆の前で既に拒んでいる(371e6; 371e9–372a5)。

しかし、ソクラテス自身は、更に「考察」を進めることを要求する。確かに、「アキレウスのいつわり」をめぐって示されたのは「人を欺く知識」であって(371a2–b1; 371b7–d7)、「約束を履行する知識」ではない。「不正は能力であり」、「正義も不正と同じ能力であり」、「わざと不正を犯すもの

は正義の能力がある意味で正しい」ことはまだ明確にされたわけではない。従って、(a)ヒッピアスは、先行の関与に従って、正義以外の領域では、「能力」の観点からの評価を受け入れるはずだ、(b)「不正な行為に能力を認め」、「いかなる領域のいかなる問いにも答える知識をもつ(364a7–9)」故に、「正義もまた知識・技術に属する」ことを承認するはずだ、と推察し、「考察」を求めているかもしれない。

確かに、ヒッピアスが正義も技術・知識・能力の一つと考える傾向にあるのだから、技術・知識・日常的動作の領域で規範的な目的に、上位の目的の為に、意図的に背く、当該の領域の能力をもつひとを確認した上で、正義という領域においても求めることはそれ自体として不自然な事ではない。

しかし、ここで駆使している「考察」とは、対話相手を引き回す、言葉の上で類似する結論(374b5–375d2)に同意することへと導く論法である。(5)ソクラテスが実際に考察を、単なる「走る人」[40]から始めるとき、「技術・知識」において成立することはまた「徳」の領域でも成立するという「類比」を意図しているかは明確ではない。(6)「技術・知識」の領域で得たヒッピアスの応答に含まれる言葉からなる、言葉の上で形式的に類似する結論を、ソクラテスは獲得しようとしている(373d7–374a1; cf. 371e9–372a5; 372d4–7)。(7)ヒッピアスが「走る人」、「相撲で投げる人」をめぐる結論にためらう時(373e5; 374a6; 374b3–4)、ソクラテスは、「身体・器官・道具・魂」を主体に見立て、「走る人」の例で導入した「醜い・恥ずかしい」を巧みに用いつつ(373e1–2)、評価の基準を行為の規範から外面的な美醜にそらしつつ、再び求める結論へと接近している。

先行の解釈4　ソクラテスはヒッピアスが自己矛盾に陥ることを示しつつ(376b4–6)、一方で解決案を示す。即ちヒッピアスの積み重ねた関与が誤っていることを、いままで前提としてきたことを改めて仮定条件として示す

[40] δρομεύς in LSJ & Woodhouse.

ことを通じて示唆している(376b5-6)[41]。

対案　対話篇を独立した作品とする限り、ソクラテスが「わざと不正を犯すもの」の存在を否定しているとは言えない。(1)ソクラテスが展開している最後の問答は、先行する対話におけるヒッピアスの関与に基づいたものである。(2)語法上 εἴπερ は話者がその内容を否定する事を含意し得るし[42]、その機能をヒッピアスも直前に認知している(376b3)。しかし常にそうとは限らない[43]。(3)不定代名詞との組み合わせが否定を必ず暗示するとは言えない。対話の当事者の基本的前提を明確にしているとも言い得る[44]。(4)先行の対話の内容によっては対話当事者にとって、先行する対話の前提を再度明らかにして確認する働きともなる[45]。実際、ヒッピアスにとっても聴衆にとっても、法や道徳が示すとおり、特定の不正行為を確信的になす犯罪者の存在は自明とされている。しかも、ソクラテスも「アキレウスのいつわり」をめぐり「真実を語ることを蔑ろにして」(370d2-3)と述べる様に、「不正を欲するとおり犯す人」の存在を自ら認めている

[41] Socher, 1820, 144–150; Hermann, 1839, 434; Croiset, 1920, 23–24; Taylor, A. E., 1926, 37; Shorey, 1933, 471; Hoerber, 1962, n.2 in 128 (cf. Blundell, 1992, n.133 in 161); Guthrie, 1975, 198–199; Irwin, 1977, 116–118; cf. 77; Kraut, 1984; Vlastos, 1991, 278; cf. 148–156; Penner, 1992, n.40 in 158; Blundell, 1992, 161–162; Allen, 1996, 25–29. 更にソクラテスが自己の教説を導入しているとする立場は、Stallbaum, 1832, 232; Zeller, 1839, 153; Apelt, 1912, 203; Pohlenz, 1913, 65; Wilamowitz, 1920, 103; Hildebrandt, 1933, 49; Gauss, 1954, 196; Gould, 1955, 43; Sprague, 1962, 76; Friedländer, 1964, 131; O'Brien, 1967, 104; Robinson, D. B., 1971, 214; Blundell, 1992, 161。逆にプラトンの立場から肯定を読み取るのは、Müller, 1979; Erler, 1987, 141。結論の暫定性を見落としているのは、Müller, 1979, p. 61; Weiss, 1981, p. 252; Blundell, 1992, p. 163。

[42] *Hp.Ma.* 285a6.

[43] Denniston, 1954, 481–490; LSJ; Kühner, ii.2.170–171.

[44] Burnet, 1924, on *Euthphr.* 4b10; Denniston, 1954, 488; n.1; cf. *Prt.* 324e1; *Ap.* 27d4; *Euthphr.* 8d9; *Mn.* 73d1; *Prt.* 352c4; contrast Kühner, ii.2.170, quoting *Euthphr.* 4b10; *Grg.* 474c9; *La.* 194d4; *Chrm.* 161e11.

[45] Erler, 1987, 135–136; Jantzen, 1989, 108; 112.

(372d4–7; 372e2–3)。従って、ヒッピアスの先行する関与に従った再考察にせよ、問いの先行条件としてその存在を認めていると、聴衆、ヒッピアスから受け取られても当然である。

従って、ヒッピアスは改めて「正義が能力である」ことを受け入れ、「力の両用性」を認める限り結論を免れない。一方ソクラテスは、なおもし否定を示唆しているとすれば、「味方に対して」(370d5–6)「真実を語ることを蔑ろにし、偽る」という「不正」を、「欲し実行する」とは別の意味を想定していることになる[46]。

しかし、この両者において、「能力」が問われる知識・技術の領域での、知識・技術の所有者と職業倫理を持った人との区別は問題として展開されず(ἐμπειρία, τέχνη, ἐπιστήμη; λογιστικός, λογιστής; δρομεύς, δρομικός)、また、悪を悪そのものの為になす可能性、正しい人が「悪」を為すとき、「悪」を受ける人、自己(cf. 371e2–3)、すべての人、いずれの為になすのかという問題には踏み込んでいない。

Ⅳ 結語

部分的ながら、従来の読み方は、対話の継起に先んじて「議論」や「教説」を先取する為に、導入される関連術語間の道徳的、非道徳的文脈での使用の交代を、一元化し、そこから、実際の対話の文脈を特定することになり、他の非整合的な部分は、ソクラテスの多義性による誤謬や、ヒッピアスの論争的稚拙さに帰されてきたが、実際は一元化できるようなものではない事が確認された。ここで、プラトンの声による文脈の整序や解消を求めるには及ばない。では、ヒッピアスはなぜ、「虚偽」や「欺き」に力を承認し、「性格」の「道徳的評価」を「能力による評価」に移行する事に関与し、それぞれの文脈による「議論」の交代を避け得ず、その結果、

[46] *Leges* IX 857b9 sqq.; cf. Saunders, 1968, 433–434; id., 1973; id., 1975, 367–369; id., 1987, 24.

「徳」を「力」とする事に基づく結論への関与を問われる事になるのか。それは、ヒッピアスの応答の内にあるのではないか。言論において欺くことを能力と考え、その力を聴衆の前に誇示しつつ、論敵を打ち負かす為に用いながら、他方で、聴衆が支持すると考える常識的な正義に対しては、擁護する態度を取り、聴衆の前で不正の実行を是認する事は、頑なに拒むからではないだろうか。「どんな領域のどんな事にも答えてみせる問答家としての自負」(364a7–9)は、この対話の文脈の錯綜を強く支配するものではないだろうか。またこの視点から対話の継起を追うとき、プラトンの描いたものがより明瞭になるのではないか。

参照文献

Allen, R. E., '*Hippias Minor*', in *Plato: Ion, Hippias Minor, Laches, Protagoras* (New Haven & London, 1996), 23–45.

Apelt, O., 'Die beiden Dialoge Hippias', in *Platonische Aufsätze* (Leipzig, 1912), 203–237.

Ast, F., *Platon's Leben und Schriften* (Leibzig, 1816).

Bluck, R. S., *Plato's Meno* (Cambridge, 1961).

Blundell M. H., 'Character and Meaning in Plato's *Hippias Minor*', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, supplementary volume: *Methods of Interpreting Plato and His Dialogues* (Oxford, 1992), 131–172.

Bowen, A. C., 'On Interpreting Plato', in *Platonic Writings, Platonic Readings*, edited by Charles L. Griswold, Jr. (New York, 1988), 49–65.

Brandwood, L., *A Word Index to Plato* (Leeds, 1976).

Brickhouse, T. C. & Smith, N. D., *Plato's Socrates* (New York; Oxford, 1994).

Burnet, J., '*Hippias Minor*', in *Platonis Opera*, Tomus III (Oxford, 1903).

—., *Plato's Euthyphro, Apology, and Crito* (Oxford, 1924).

Calogero, G., *L'Ippia Minore* (Firenze, 1948).

Cherniss, H., *The Riddle of the Early Academy* (Berkeley, 1945).

Cook, A., *The Stance of Plato* (Boston, 1996).

Croiset, M., *Hippias Mineur*, in *Platon: Oeuvres Complètes*, Tome I (Paris, 1920), 19–45.

Crombie, I. M., *An Examination of Plato's Doctrines, I. Plato on Man and Society* (London, 1962).

Day, J. (ed.), *Plato's Meno in focus* (London, 1994).

Davison, A., 'Indirect Speech Acts and What to Do with Them', *Syntax and Semantics* 3 (1975), 143–185.

Denniston, J. D., *The Greek Particles*, 2nd edition (Oxford, 1954).

Dodds, E. R., *Plato: Gorgias: A revised Text with Introduction and Commentary* (Oxford, 1959).

Dover, K. J., *Greek Popular Morality in the Time of Plato and Aristotle* (Oxford, 1974).

Erler, M., *Der Sinn der Aporien in den Dialogen Platons* (Berlin, 1987).

Fouillée, A., *Platonis Hippias Minor sive Socratica contra Liberum Arbitrium Argumenta* (Paris, 1872).

Frede, M., 'Plato's Arguments and the Dialogue Form', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, supplementary volume 1992: *Methods of Interpreting Plato and His Dialogues*, edited by James C. Klagge and Nicholas D. Smith (Oxford, 1992), 201–219.

Friedländer, P., *Plato 1: an Introduction*, translated from the German by Hans Meyerhoff, 2nd edition with revisions (Princeton, 1969).

—., 'Der kleine Hippias', in *Platon*, [3 Bände], Band II: die platonischen Schriften, erste Periode, 3. Auflage (Berlin, 1964), 125–134.

Gauss, H., 'Hippias Minor', in *Philosophischer Handkommentar zu den Dialogen Platos*, 1. Teil 2. Hälfte (Bern, 1954), 193–200.

Giannantoni, G., *Socratis et Socraticorum Reliquiae*, collegit, disposuit, apparatibus notisque instruxit Gabriele Giannantoni, 4 vols (Bibliopolis, 1990).

Goldschmidt, V., 'Hippias Mineur', in *Les Dialogues de Platon: Structure et*

Méthode Dialectique (Paris, 1947), 103–112.

Gomperz, Th., an essay on the *Hippias Minor* in *Greek Thinkers: A History of Ancient Philosophy*, Vol. II, translated by G. G. Berry (London, 1912; originally published in German in 1912), 291–296.

Gould, J., *The Development of Plato's Ethics* (Cambridge, 1955).

Grote, G., '*Hippias Minor*', in *Plato and Other Companions of Socrates*, Vol. II (in 4 vols), a new edition (New York, 1973), 55–70 (Reprint of the 1880 edition published by J. Murray in London; first published in 1865).

Gulley, N., *The Philosophy of Socrates* (London, 1968).

Guthrie, W. K. C., 'The *Hippias Minor*', in *A History of Greek Philosophy IV: Plato, the Man and His Dialogues: Earlier Period* (Cambridge, 1975), 191–9.

Hermann, F., *Geschichte und System der Platonischen Philosophie* (Heidelberg, 1839).

Hildebrandt, K., 'Jon und Hippias: Kampfansage gegen den Geist der Gesellschaft', in *Platon: Logos und Mythos*, 2. Auflage (first published in 1933) (Berlin, 1959), 44–49.

Hoerber, R. G., 'Plato's *Lesser Hippias*', *Phronesis* 7 (1962), 121–131.

Hunziker, J., '*Hippias Minor*, I, 272 sqq.', in *Argumenta Dialogorum*, [by] J. Hunziker, in *Platonis Opera*, Vol. III, by Hirschig, R. B. (Paris, 1873), 28.

Irwin, T. H., *Plato's Moral Theory: The Early and Middle Dialogues* (Oxford, 1977).

—., 'Reply to David L. Roochnik', in *Platonic Writings; Platonic Readings*, edited by Charles L. Griswold, Jr. (New York, 1988), 194–199.

—., 'Plato: the intellectual background', in *The Cambridge Companion to Plato*, edited by Richard Kraut (Cambridge, 1992), 51–89.

—., *Plato's Ethics* (Oxford, 1995).

—., 'Art and Philosophy in Plato's Dialogues', *Phronesis* 41 (1996), 335–350.

Jantzen, J., *Hippias Minor oder der falsche Wahre: über den Ursprung der moralischen Bedeutung von „gut"*, Kommentar von Jörg Jantzen mit der Übersetzung von Friedrich Schleiermacher (Weinheim, 1989).

Jowett, B., *Lesser Hippias* in *The Dialogues of Plato*, translated into English with analysis and introduction, vol. I, 4th edition (4th edition: 1953; 1st edition: 1871) (Oxford, 1969), 603–623.

Kahn, Ch., 'Vlastos' Socrates', *Phronesis* 37 (1992), 233–258.

—., *Plato and the Socratic Dialogue: The Philosophical Use of a Literary Form* (Cambridge, 1996).

Kidd, I., 'Socratic Questions', in *Socratic Questions: New essays on the philosophy of Socrates and its significance*, edited by Barry S. Gower and Michael C. Stokes (London and New York, 1992), 82–92.

Klosko, G., 'Criteria of Fallacy and Sophistry for Use in the Analysis of Platonic Dialogues', *Classical Quarterly* 33 (1983), 363–374.

Kosman, L. A., 'Silence and Imitation in the Platonic Dialogues', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, supplementary volume 1992: *Methods of Interpreting Plato and His Dialogues*, edited by James C. Klagge and Nicholas D. Smith (Oxford, 1992), 73–92.

Kraus, O., *Platons Hippias Minor: Versuch einer Erklärung* (Prag, 1913).

Kraut, R., 'Perplexity in the *Hippias Minor*', in *Socrates and the State* (Princeton, 1984), 311–316.

—., 'Reply to Clifford Orwin', in *Platonic Writings; Platonic Readings*, edited by Charles L. Griswold, Jr. (New York, 1988), 177–182.

—., 'Introduction to the study of Plato', in *The Cambridge Companion to Plato*, edited by Richard Kraut (Cambridge, 1992), 1–50.

Kühner, R., *Ausführliche Grammatik der Griechischen Sprache* von Raphael Kühner, dritte Auflage in Zwei Bänden in neuer Bearbeitung besorgt von Bernhard Gerth (Hannover und Leipzig, 1898–1904).

Lyons, J., *Structural Semantics: an Analysis of Part of the Vocabulary of Plato* (Oxford, 1963).

A Greek-English Lexicon, compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones ... (Oxford, 1977) (abbreviated to LSJ).

MacDowell, D., 'The Meaning of ἀλαζών', in *'Owls to Athens': Essays on*

Calassical Subjects Presented to Sir Kenneth Dover, edited by E. M. Craik (Oxford, 1990), 287–292.

Momigliano, A., *The Development of Greek Biography* (Cambridge, Massachussets, 1993).

Mulhern, J. J., '*Tropos* and *Polytropia* in Plato's *Hippias Minor*', *Phoenix* 22 (1968), 283–288.

Müller, G., 'Platonische Freiwilligkeit im Dialoge *Hippias Elatton*', *Würzburger Jahrbücher für die Altertumswissenschaft*, N. F. 5 (1979), 61–79.

Nightingale, A. W., *Genres in dialogue: Plato and the Construct of Philosophy* (Cambridge, 1995).

Nussbaum, M., *The Fragility of Goodness* (Cambridge, 1986).

O'Brien, M. J., *The Socratic Paradoxes and the Greek Mind* (Chapel Hill, 1967).

Ovink, B. J. H., 'Der *Hippias Minor*', in *Philosophische Erklärung der platonischen Dialoge Meno und Hippias Minor* (Amsterdam, 1931), 125–201.

Patzer, A., *Antisthenes der Sokratiker* (Inaugural-Dissertation) (Marburg, 1970).

Penner, T., 'Socrates on Virtue and Motivation', in *Exegesis and Argument: Studies in Greek Philosophy Presented to Gregory Vlastos*, edited by E. N. Lee, A. P. D. Mourelatos, R. M. Rorty (Assen, 1973), 133–151 (*Phronesis*, supplementary volume I, 1973).

—., 'Socrates and the Early Dialogues', in *The Cambridge Companion to Plato*, edited by Richard Kraut (Cambridge, 1992), 121–169.

Philips, J., 'Xenophon's *Memorabilia*, 4.2', *Hermes* 117 (1989), 366–370.

Pohlenz, M., 'Der kleine Hippias', in *Aus Platos Werdezeit: philologische Untersuchungen*, von Max Pohlenz (Berlin, 1913), 57–77.

Press, G. A., 'Principles of Dramatic and Non-Dramatic Plato Interpretation', in *Plato's Dialogues: New Studies and Interpretations*, edited by Gerald A. Press (Lanham, 1993), 107–128.

Ræder, H., an essay on *Hippias Minor* in *Platons Philosophische Entwickelung* (Leipzig, 1905), 94–95.

Riginos, A. S., *Platonica: The Anecdotes Concerning the Life and Writings of Plato*, Columbia Studies in the Classical Tradition, vol. 3 (Leiden, 1976).

Ritter, C., an essay on *Hippias Minor* in Chapter 1: *The Ethical Content of the Early Dialogues* in *The Essence of Plato's Philosophy* by Constantin Ritter, translated by Adam Alles (London, 1933), 37–39 (the original German text: *Kerngedanken der Platonischen Philosophie* [1931]).

—., 'Der kleinere Hippias', in *Platon: Sein Leben, seine Schriften, seine Lehre*, Vol. I in 2 vols (München, 1910), 297–308 (Vol. II published in 1923).

Robinson, D. B., 'Introduction to *Lesser Hippias*', in *The Dialogues of Plato*, Vol. I, translated by B. Jowett, edited by R. M. Hare and D. A. Russell (London, 1971), 213–215.

Robinson, R., *Plato's Earlier Dialectic*, 2nd edition (1st edition, Cornell, 1941) (Oxford, 1953).

Ross, W. D., *Aristotle's Metaphysics*, a revised text with introduction and commentary by W. D. Ross, 2 vols (Oxford, 1988; first published in 1924).

Rowe, Ch., 'On Reading Plato', *Méthexis* 5 (1992), 53–68.

Rutherford, R. B., *The Art of Plato: Ten Essays in Platonic Interpretation* (Cambridge, Massachusetts, 1995).

Sandbach, F. H., 'Plato and the Socratic Work of Xenophon', in *The Cambridge History of Classical Literature I: Greek Literature*, edited by P. E. Easterling and B. M. W. Knox (Cambridge, 1985), 478–497.

Santas, G., *Socrates: Philosophy in Plato's Early Dialogues* (London, 1979).

Saunders, T. J., 'The Socratic Paradoxes in Plato's *Laws*; A Commentary on 859c–864b', *Hermes* 96 (1968), 421–34.

—., 'Plato on Killing in Anger: A reply to Professor Woozley', *Philosophical Quarterly* 23 (1973), 350–356.

—., *Plato, The Laws*, revised edition (first published in 1970) (London, 1975).

—., 'Introduction to Socrates', in *Plato: Early Socratic Dialogues*, edited with a general introduction by Trevor J. Saunders (London, 1987), 13–36.

Schleiermacher F., *Hippias der kleinere* in *Platons Werke*, 2. Aufl., 1. Theil, 2. Bd. (Berlin, 1818), 289–320.

Schneidewin, W., *Platons zweiter 'Hippias' Dialog* (Paderborn, 1931).

Sciacca, G. M., 'Ippia Minore 376B', *Giornale di Metafisica*, 8 (1953), 670–680.

Scodel, H. R., *Diaeresis and Myth in Plato's Statesman* (Göttingen, 1987).

Shorey, P., 'The *Hippias Minor*', in *What Plato Said* (Chicago, 1934; first published in 1933), 86–90.

Smith, G., *Platonis Ion et Hippias Minor; for the Upper Forms of Schools* (London, 1895).

Socher, J., *Ueber Platons Schriften* (München, 1820).

Sprague, R. K., 'The *Hippias Minor*', in *Plato's Use of Fallacy: A Study of the Euthydemus and Some Other Dialogues* (London, 1962), 65–79.

Stallbaum, G., *Hippias Minor* in *Platonis Dialogos Selectos*, Vol. IV, Sect. I (Gothae et Erfordiae, 1832), 229–274.

Stokes, M. C., *Plato's Socratic Conversation: Drama and Dialectic in Three Dialogues* (London, 1986).

—., 1992 (a) = 'Socrates' Mission', in *Socratic Questions: New essays on the philosophy of Socrates and its significance*, edited by Barry S. Gower and Michael C. Stokes (London and New York, 1992), 26–81.

—. 1992 (b) = 'Plato and the Sightlovers of the *Republic*', in *The Language of the Cave*, edited by Andrew Barker and Martin Warner (Edmonton, 1992), 103–132 (*APEIRON: a journal for ancient philosophy and science*, Vol. 25, no. 4 [December 1992]).

Strauss, L., *The City and Man* (Chicago and London, 1964).

Tarrant, D., *The Hippias Major Attributed to Plato*, reprint edition (first published in 1928) (Salem, 1988).

Taylor, A. E., 'The *Lesser Hippias*', in *Plato: the Man and His Work* (London, 1978), 35–38 (first published in 1926).

—., 'On the Alleged Distinction in Aristotle between Σωκράτης and ὁ Σωκράτης', in *Varia Socratica, First Series* (Oxford, 1911), 40–90.

Taylor, C. C. W., *Plato: Protagoras*, revised edition (Oxford, 1991).

Thayer, H. S., 'Meaning and Dramatic Interpretation', in *Plato's Dialogues: New Studies and Interpretations*, edited by Gerald A. Press (Lanham, 1993), 47–60.

Thesleff, H., 'Looking for Clues. An Interpretation of Some Literary Aspects of Plato's "Two-Level Model"', in *Plato's Dialogues: New Studies and*

Interpretations, edited by Gerald A. Press (Lanham, 1993), 17–46.

Tigerstedt, E. N., *The Decline and Fall of the Neoplatonic Interpretation of Plato: an outline and observation.* (Helsinki, 1974).

—., *Interpreting Plato* (Uppsala, 1977).

Turner, E. G., *Greek Manuscripts of the Ancient World.* 2nd edition, revised and enlarged, edited by P. J. Parson (London, 1987) (*Bulletin of the Institute of Classical Studies*, Supplement 46).

Vander Waerdt, P., 'Socratic Justice and Self-Sufficiency: the Story of the Delphic Oracle in Xenophon's *Apology of Socrates*', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11 (1993), 1–48.

—., *The Socratic Movement*, edited by Paul A. Vander Waerdt (Ithaca and London, 1994).

Vlastos, G., 'Introduction', in *Protagoras*, [by] Plato: Benjamin Jowetts's translation, extensively revised by Martin Ostwald, edited, with an introduction, by Gregory Vlastos (Indianapolis; New York, 1956), vii–lviii.

—., 'Introduction: The Paradox of Socrates', in *The Philosophy of Socrates: A Collection of Critical Essays*, edited by Gregory Vlastos (Notre Dame, 1980) (first published in 1971).

—., 'The Socratic Elenchus', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1 (1983), 27–58. (Cf. Richard Kraut, 'Comments on Gregory Vlastos, "The Socratic Elenchus"', ibid., 59–70; Vlastos 'Afterthoughts on the Socratic Elenchus', ibid., 71–74.)

—., *Socrates: Ironist and Moral Philosopher* (Cambridge, 1991). ('The *Hippias Minor* — Sophistry or Honest Perplexity?' [Additional notes: 5.1]: 275–280.)

—., 'The Socratic elenchus: method is all', in *Socratic Studies* by Gregory Vlastos, edited by Myles Burnyeat (Cambridge, 1994), 1–37.

Waterfield, R., *Hippias Minor*, in *Hippias Major and Hippias Minor*, translated and introduced by Robin Waterfield, in *Plato: Early Socratic Dialogues*, edited with a general introduction by Trevor J. Saunders (London, 1987), 212–293.

Weingartner, R. H., *The Unity of the Platonic Dialogue* (Indianapolis and New

York, 1973).

Weiss, R., '*Ho Agathos* as *Ho Dunatos* in the *Hippias Minor*', in *Essays on the Philosophy of Socrates*, edited by Hugh H. Benson (Oxford, 1992), 242–262 (originally published in *Classical Quaterly*, 31 [1981], 287–304).

Wilamowitz-Moellendorff, Ulrich von, *Platon, sein Leben und seine Werke*. Nach der dritten vom Verfasser herausgegebene Auflage durchgesehen von Bruno Snell (Berlin; Frankfurt am Main, 1948) (first published in 1920).

Woodhouse, S. C., *English-Greek Dictionary* (London, 1910).

Woodruff, P., *Plato: Hippias Major* (Oxford, 1982).

Zeller, E., 'Ueber die Aechtheit oder Unächtheit des Menexenos und des kleinen Hippias', in *Platonischen Studien* (Tübingen, 1839), 144–156.

—., *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung* dargestellt von Eduard Zeller. 2. Theil 1. Abhandlung, 2. Aufl. (Tübingen, 1859).

Zembaty, J. S., 'Socrates' Perplexity in Plato's *Hippias Minor*', in *Essays in Ancient Greek Philosophy*, III, edited by J. P. Anton and A. Preus (Albany, 1989), 51–70.

井上忠　「プラトンへの挑戦——質料論序論——」　『根拠よりの挑戦——ギリシア哲学究攻——』(東京大学出版会、1974) 3–36

田中美知太郎　「プラトンにとって著作とは何であったか」　『プラトン生涯と著作』(岩波書店、1979) 436–465

藤沢令夫　「プラトン的対話形式の意味とその必然性——文学と哲学——」『イデアと世界——哲学の基本問題——』(岩波書店、1980) 65–94

加藤信朗　「プラトン解釈の問題点」(東京大学出版会、1988) 3–52

吉田雅章　「『デュナミス』をめぐる、ひとつの考察——プラトン『ヒッピアス(小)』の問題」　『長崎大学教養部紀要(人文科学編)』　20–2 (1980) 1–15

小沢克彦　「『偽りの人』と『よき人』——プラトン、小ヒッピアス篇の問題——」　『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』 31　(1983) 54–70

清水哲郎　「ソクラテスのオデュッセイア——『ヒッピアス(小)』の複層

構造――」 『哲学』(北海道大学哲学会編) 24 (1988) 1–21

戸塚七郎訳 『ヒッピアス(小)』 『プラトン全集』第 10 巻(岩波書店、1975年)

村治能就訳 『ヒッピアス(小)』 『プラトン全集』第 6 巻(角川書店、1974年)

(たき あきつぐ/博士課程)